第9編 北アフリカの国際都市

地図をみると、チュニジアは地中海文化圏にあることがわかる。その首都チュニス[*1]の城壁で囲われた旧市街地は、その至宝の一つである。長い歴史を紐どけば、古代フェニキア人[*2]の時代にさかのぼる。近傍のカルタゴ[*3]の衛星都市であった。それ故の悲哀を繰り返し、7世紀にウマイア朝によってカルタゴが占領されると、それ以降アラブの支配下となった。その後16世紀半ばにオスマン帝国が占領し、次々と変わる権力の中枢によって、国際色豊かな都市として発展を遂げる。東西南北に様々な国が跋扈した地中海沿岸に立地する都市の特徴である。

19世紀になってその力が衰えると欧州諸国の庶民地化が及びはじめ、1881年フランス保護領となった。いまだにフランス語が通じるのはこのためである。第2次世界大戦時にはナチスドイツに占領されヴィッシー[*4]政権の影響下となるが、終戦直前に解放され、さらに独立運動によってフランスから独立したのは1956年のことであった。

写真 09-1 チュニス旧市街地の家並み

写真 09-2 コンバージョンされた小ホテル

*1 Tunis：チュニジア共和国の首都。アフリカ有数の世界都市

*2 Phoenicia：古代の地中海東岸に位置した歴史的地域名

*3 Carthage：チュニス近傍のチュニス湖東岸にあった古代都市国家

*4 Vichy：第二次世界大戦ナチス占領下に傀儡政権が置かれたフランス中部の小都市

立派な凱旋門のような正面の入口から旧市街地に入ると、他でも見慣れたスーク独特の活気と、鼻腔を快く刺激する香辛料の香りが漲る。あらかじめイメージしていた期待は裏切られない。さらに、上記のようなめくるめく歴史の断片がそこかしこにちりばめられ、その跡を追うだけでもあっという間に時が過ぎていく。その道すがら手練れの建築家が手掛けたに違いない、美しく改修された宿泊施設などに出会うこともある（写真09-2）。観光客相手の呼び込みやサービスの押し売りに辟易としながらも、軽くいなす術を身に着けて、ただひたすら毅然と歩けばいいのだ。

だから当然一日では足りない。まだ肌寒い初春だったが、会議の前後や合間に時間を見つけてはこの旧市街地に通った。そして、入り組む迷路に仕込まれた陽だまりや、切り取られた青空を探しながら、地中海の、そしてアラブの陰翳礼讃を心ゆくまで楽しんだ（写真09-3、4）。

写真 09-3 絨毯屋の陽だまり

写真 09-4 スーク天蓋の陰翳礼讃